

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 塩谷暁代

論 文 題 目

カメルーン首都ヤウンデをめぐる都市－農村間の農作物流通と女性商人の商業活動

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	嶋田義仁
委員	名古屋大学教授	阿部泰郎
委員	名古屋大学教授	金山弥平
委員	名古屋大学准教授	佐々木重洋
委員	中部大学教授	和崎春日

論文審査の結果の要旨

「本論文の概要」

本論文は、アフリカ・カメルーン共和国の首都ヤウンデをめぐる都市－農村間の農作物流通と女性商人の文化人類学的研究である。ヤウンデはフランス委任統治領カメルーンの首都として成長した植民地都市の典型である。人口はカメルーン独立後の1964年約10万人であったが、2010年には2百万人の大都市となった。これにともない、ヤウンデの食料需要は急増し、近郊農村からの農産物販売が活発化した。農産物流通の主要な担い手は近郊農村女性(とりわけエトン族女性)であり、バイヤセラムという市(いち)の小売専門女性商人も誕生した。本論文は、かかるヤウンデの都市的発展にともなう農作物流通の発展をエトン族女性商人に注目しつつあきらかにする。

本論文は序論と7章からなる。序論はアフリカ都市人類学の方法論的検討。1, 2章ではカメルーン国とその首都ヤウンデの概観、3章ではヤウンデの広大な露天公設市を中心とする流通機構、4章ではエトン女性商人の商業活動、5章ではエトン女性の農村生活と農産物商品化、6章ではエトン女性の商業活動と都市生活への進出方法、7章では女性商人を取り巻く近年の環境変化(露天市の改革など)、が論じられる。

ヤウンデ周囲の農村は高温多雨の熱帯雨林気候下にある。主要農作物は、換金作物のカカオや落花生と、バナナ、マニオック等の根菜類である。植民地化以前市はなく、商業経済未発達な地域であったが、ヤウンデの都市的成長とともに、農産物商品化が農民女性中心に活発となり、農産物の購入と販売に専門化した女性商人(同部門商人の80%)バイヤセラムが誕生する。その商業活動は、販売価格に水増ししない正価販売と即日販売可能な仕入れという合理的な堅実経営であるが、生活は都市的関係と農村との連携に支えられている。農村から都市へ、伝統から近代へ、部族社会から都市的多部族社会へ、という一方向的戦略ではなく、対立する生活様式を状況に応じて組み合わせる2者択一的でない多方向戦略をとっているのである。

女性農産物商人形成の要因は、商品作物栽培が課せられた男性とちがい、女性は現金収入を自給農作物の商品化によって得ざるをえなかったことにある。それ故、専門化した女性商人の背後には農産物販売もおこなう多数の農民女性があり、商品化された農作物の背後にも、大量の自給的農作物が控える。しかしヤウンデの都市的成長と農産物流通を支える運輸手段の発達により、農作物商品化は時代の趨勢となった。例えば、農民女性の徒歩運搬による首都への農作物輸送にはじまり、地方市形成とともに、地方市までの徒歩輸送と地方市から首都への乗合バス・トラック輸送が生じ、現在は、乗合タクシー運送によるヤウンデへの直接の輸送が中心になっている。

論文の最終章では、近年のヤウンデの市場環境の著しい変化が取り上げられる。路上の無許可商人を生みだしながら無秩序に発展してきたかにみえる露天市が近代的に整理されはじめた。市近辺のスラム街や無許可の路上店舗は一扫され、常設店舗設備

論文審査の結果の要旨

が増設され、市の使用料が値上げされた。行政的に整備管理された流通機構のなかで女性商人が今後どのように変化し、どのような流通機構を作り上げてゆくのか、それを追うのは、論者に課せられた今後の研究課題である。

[本論文の評価]

わが国のアフリカ研究の歴史は 50 年を越えたが、嶋田・松田・和崎編による『アフリカの都市的世界』(2001)があるものの、アフリカの都市人類学研究は少ない。なかでも、アフリカ近代都市の典型である植民地都市研究は、松田素二のナイロビ研究と野元美佐のカメルーン商人研究が挙げられるのみである。ヤウンデ都市の農産物流通とそれを担う女性商人の活動を詳細に分析した本研究は、植民地型アフリカ都市研究のパイオニア的研究に数えることができる。

しかも植民地型都市の研究は、植民地政策や国家政策の観点から研究されやすいが、本論文が明らかにしたのは、アフリカ農民女性の主導的な役割によって発展してきたヤウンデ都市の農産物流通と、そのような農民女性出身商人像とその商業活動の解明であった。本論文には、農産物流通量やその経済的価値の数字的な統計とその経済学的分析はないが、農産物流通の実態とそこにかかわる女性商人の活動に関するきめ細やかな観察とその分析が本論文を構成している。その結果、植民地起源のいわば官製都市であるヤウンデの都市生活を支える根幹というべき農産物流通が、農村女性の自助努力の積み上げによって支えられてきたという驚くべき事実があきらかにされた。これは農村と都市を異質な世界として対立的にとらえる従来のアフリカ都市人類学と異なり(それには、伝統から近代へという「脱部族モデル」手法と、伝統か近代化かという「選択モデル」手法がある、と著者はいう)、農村・都市関係を連続体としてとらえ、農産物生産者と都市的商人、自給作物としての農産物と商品作物としての農産物を一つの連続的システムとして理解するダイナミックな農産物流通論に導く。それは、生活実践に注目して生活の場における伝統と近代の相互作用の様態を丹念に観察分析する「脱モデル」的方法、具体的には長期間にわたって繰り返された女性商人宅に同居しての、農産物流通の現実に密着した人類学的調査であった。かかる方法によって新たなアフリカ都市像を示した本研究は、アフリカ都市人類学研究、経済人類学研究の国際的な趨勢からみても評価すべき価値を有する。

ただし「脱モデル」方法は、生活実践の詳細を積み重ねる結果、理論的分析が不十分になるか、理論的解析が不鮮明になる恐れもある。本論文にもかかる懸念を抱かせる部分はあるが、今後のより焦点を絞った研究により、より深い分析が可能となるとともに、新たに重要な成果が生み出されることが本論文から確実に期待される。それ故アフリカ都市経済人類学の独創的なモノグラフィーであるとともに、様々な可能性を含んだ本論文は、博士(文学)の学位申請論文として、審査委員一同合格とした。